書評

方波見康雄　著
生老病死を支える
－地域ケアの新しい試み－

札幌市医師会
藤女子大学人間生活学部長　藤井　義博

「生老病死を支える－地域ケアの新しい試み－」(岩波新書 992、2006 年1月20日 第1刷発行　岩波書店　全218ページ）は、故郷で父業の医療を継承して46年、方波見康雄氏による「開業医医療方法論叙説」である。この叙説はまた、その過程で病を得た著者の有機的に照応しあう世界との邂逅と甦りの物語でもある。そこには「患者になった自分に医師である私が謙虚に学ぶ」深い自己洞察があり、自己自賛、回顧趣味は全くない。その原点は、父の黒い鞄を使って代診役の往診時、患者の最期の看取りをした帰り道、冬銀河すなわち遍在世界との出会いに遡る。「後年、がん末期の方々や高齢者の在宅ターミナルケアに深くかかわるようになったのは、このときの不思議ともいうべき体験が導きとなったのかも知れない。いまにして、そう思う」と、著者は述べている。これは古代ギリシアの医神アスクレピオスの後継者のように、著者が父業の医療を継承した瞬間であるとともに、「夜の存在」との決定的な出会いの瞬間でもあった。それは、「貧しかったが昼と夜とが自然のバランスを保ち、生きるかなしみへの想像力があり、心も穏やかであった日本の旧き時代」であったからこそ生まれ得た原点かもしれない。このように生まれ故郷をフィールドとして、「天与の恩寵」「医師の果報」である、著者の患者さんに学ぶ開業医医療、臨床医の任務が始まった。

「夜」との邂逅に発する叙説が成熟するには、「夜の喪失」という成熟への抵抗との葛藤が不可決であったように思われる。都市化と自然の排除は、都会人の視点とともにその属性である「夜の喪失」もたらした。一方では「強い自己主張の立場」をとる医療を生み出すとともに、他方では「世代別に分断された人生」「自分の体を小刻みに別けて大病院の専門診療科に臓器だけを届けるような、市民の受療行動」をも生み出してしまった。そこでは、目先の打算、悲しみはそれぞれに深い個別性をたたえているという深いものへの鈍感さ、我慢することすなわち人間を誇ることが日常化している。そして葬式仏教という葬の風化は、「おちつかれたか」という『こだまさない』言葉に象徴されるように、僧侶においても深いものへの鈍感さを生み出してしまった。このような抵抗との葛藤の中から、開業医医療は、人生的出会い、終世の課題、言葉の創造的実践であるとの認識が形成され、照応する感性、老熟の稔り、いのちの風光の不思議に満ちた叙説のページは豊かになっていった。隔離をしないホスピスの精神、文化的、社会的、歴史的、霊的存在としての人間存在への共感、内発性と人生の先輩であるお年寄りへの虚心の畏敬、老いて持つべきものは手鏡となってくれるエスプリをもつ友人という叡智、『こだまさない』言葉を発したお坊さんが浮かばれなくては困るという慈愛、対話とくつろぎと冗談と「触診」の生活回診、本人と家族をユニットとした専ら傾聴の悲嘆ケア、在宅末期がんターミナルケアの実践・・・・。

しかしながら叙説は、著者が病を得たことで思いがけない転調を示すことになった。それは「患者になった自分」を「医師であるわたし自身」が謙虚に学ぶことによる自己洞察の深まりがもたらした「病気の余慶」であった。著者にとって、「こんなに休めるのは医師になってから、ほとんど初めてのこと」であり、わが身にも休息とやすらぎが必要だったことを初めて自覚した経験となった。そして「人間至るところ散歩道あり」と喝破し、この頃に始められた俳句は甦りを象徴するできごととなった。「陰緑にしばしの憩いわれとがん」。この世・この人生・この露の身・この瞬間の命の最期を看取り詠じた、「心音は天籟に帰す冬銀河」。句作は、著者が大好きな詩人である茨木のり子の言葉「自分の感受性くらい　自分で守れ　ばかものよ」に呼応する著者の自戒の実践でもある。

叙説は、セネカの指摘「『生は短く術は長し』とヒポクラテスは言うが誤りである。われわれは短い人生を受けているのではなく、われわれがそれを短くしているのである」に呼応して、「人生の成熟と余熟のゆとり」を「地域ケアの新しい試み」に注ぐ。それは、社会的共通資本としての医療と教育、人類文化としての医療の実践、生老病死をおたがい支えあう新しい地域ケアづくりである。叙説はこの「小さな国」を、身勝手な自己主張から相互理解・相互評価への転換、バリアをフリーにした柔軟な思考での対応とおたがいの自戒の共有、多様な視点の総合に基づいて構築してゆく希望の姿を伝えてくれる。「小さな国」という船を進水させてゆく「海への傾斜」の形成は始まったばかりである。今後の叙説のページが更新されて、それが地域に生きる人々の希望の内に、より精緻で力強い引力線として形成されてゆく姿をこころから期待したい。このように「生老病死を支える－地域ケアの新しい試み－」は、今後の地域で「小さな国」を形成してゆくときの実践的な精神風土の鏡となる良書であり、じっくり読まれることを職種を越えた読者に推薦したい。